

「出雲神話」を歩く
—地域における神話の受容とその教育—
Walking in the World of Izumo Myths
- Acceptance and Education of Mythology in the Community -

山 村 桃 子
(地域文化学科)

キーワード：出雲神話、黄泉比良坂、金屋子神、八岐大蛇伝承、美保神社

1. はじめに

島根県東部・出雲地方は、奈良時代に成立した『古事記』（712年）や『日本書紀』（720年）の神話・歴史書におけるイザナミ、スサノヲ、オホクニヌシなどの神々の物語、いわゆる「出雲神話」の舞台である。現在においても、出雲地方には多数の神社や史蹟があり、博物館などの施設も充実する。

本学短期大学部総合文化学科では、古典文学を座学のみで学ぶのではなく、学外でのフィールド学習を併せて実施する「日本古典文学を歩く」（2年生後期開講）の授業が長年行われてきた。筆者の着任以降は、2012年から2018年の7年間、自身の専門分野に基づいて『古事記』『出雲国風土記』を教材とし、その舞台となった場所のフィールド学習を実施した¹⁾。2018年度の本学科のカリキュラムの大幅な改編により本授業は終了し、一つの区切りを得た。本稿はその実践報告である。神話の解釈や比定地には諸説あり、定まらないものも多い。これらの考察は別の機会に譲り、学習内容の報告に留めたい。

2. 授業の内容と方法

本学科旧課程における日本語文化系では、日本文学・日本語学・日本の文化や歴史の分野において、それぞれ入門となる必修科目を設けていた。そのうち古典文学の必修科目である「日本古典文学入門」（1年生前期）では、『古事記』の「出雲神話」と『出雲国風土記』の国引き神話を取り上げ、話の概要や比定地などの解説、また比較神話の観点から日本の神話の特徴を考察した。こうした基礎的な段階をふまえ、さらに神話に興味をもつ学生が選択科目である「日本古典文学を歩く」を履修し、より専門的な内容を学ぶことができるようカリキュラムを構成した。

授業は「出雲神話」を中心に学ぶことを目的とし、その代表神であるイザナミ、スサノヲ、オホクニヌシの三神に分けて講義とフィールド学習を行った。一概に「出雲神話」といえども、『古事記』と『日本書紀』ではその内容が大きく異なる。本科目では、入門科目で触れられなかった『日本書紀』の構成等に触れ、記紀の比較を通して『古事記』に記された神話の特徴を把握することとした。また江戸期に成立した松江藩の地誌『雲陽誌』等を用い、後世における神話の受容の様相についても学ぶこととした。以下はその神話の違いについての学生のコメントである。

当初の私は「神話といったら、日本の中なら大体同じようなものだろう」という印象を抱いていた。しかし『古事記』と『日本書紀』の比較や、『出雲国風土記』、『雲陽誌』を通して、それは違うのだと気づいた。例えば、八岐大蛇伝承を取り上げると、八岐大蛇の居所は、『古事記』では高志^{こし}、『日本書紀』では八丘、八谷の間、『雲陽誌』では八頭坂、あまが淵だとされる。伝承はその当時の時勢と残されることになった理由に大きく左右されるので、このように同じ伝承でも差異が生まれてくるのだとわかった。また、この八岐大蛇の伝承が残される文献から、八岐大蛇はどのような存在かを考察したが、八岐大蛇ひとつ取っても複数の説が存在しており、八岐大蛇は斐伊川の象徴という考えもある。この伝承の違いは、その文献が残されたときの情勢、考え方を知る上で貴重な資料である。そして現在、伝承地に残された信仰を知る上でも大切な資料であると思った。(H30年度/A)

また、効果的なフィールド学習を行うために求められるのが事前・事後学習である。講義の内容をふまえ、各フィールド学習の前後には、予習を目的とする事前レポートと、学んだ内容の整理を目的とする事後レポートを課した。計6枚のレポートは総括に用い、表紙を付けて返却し、学生自らの学びの記録とした。

3. イザナミ神話と受容

1) 比婆山と黄泉比良坂

『古事記』⁽²⁾において、イザナミの死に関わる部分は次のように記される。

其の、神避れる伊耶那美神は、出雲国と伯伎国との堺の比婆之山に葬りき。
(『古事記』上巻)

この「比婆之山」の比定地について、注釈書においては主に未詳とされるが、参考として挙げられるのは広島県庄原市西城町と島根県安来市伯太町の二つの比婆山である⁽³⁾。さらに諸説あるが、本授業ではこれら二つの比定地についての説と各地における顕彰運動を取り上げ、古事記の最初の注釈書である『古事記伝』と『雲陽誌』の記述をもとに、主に島根県の比婆山の立場

から考察を行った⁽⁴⁾。

また『古事記』では、イザナキが黄泉国から逃げ戻る際に「黄泉比良坂」を通ったことが記される。

後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾くして、御佩かしせる十拳の剣を抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。…最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。爾くして、千引の石を其の黄泉ひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ」といひき。…其の黄泉坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞り坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。 (『古事記』上巻)

この「黄泉ひら坂」は、本文の中で「出雲国の伊賦夜坂」とであると記される。即ち島根県松江市東出雲町の地名「揖屋」と考えられ、その地名を冠した揖屋神社は『日本書紀』には「言屋社」、『出雲国風土記』に「伊布夜社」と記載される。『雲陽誌』には、松江市の大庭や岩坂などの地域にイザナミと関わる記述があり、古代出雲国における意宇郡の領域とイザナミの信仰の関わりを思わせる。

現在、黄泉比良坂として整備された地は、皇紀 2600 年を記念するものとして、1940 年に当時の揖屋村長であった佐藤忠次郎によって作られたものである。授業では、皇紀の概念、戦時中における皇紀の祝賀意図、櫃原神宮や陵墓の整備と地方への波及について講義を行った。その一例であり、また神話の受容のひとつのあり方として、東出雲町平賀地区の「黄泉比良坂」のフィールド学習を行った。以下は学生のレポートである。

東出雲町の伊賦夜坂は、道中に塞の神が祀られ、峠を越えていく人々が安全を祈った。『古事記』の伝承から、昭和 15 年に「神蹟黄泉平坂伊賦坂傳説地」と彫られた石碑が建立されるなど、強く信じられている。また「平賀」という地名は「比良坂」が変化したものと言われる。さらに、「附谷」という地名は、イザナミが黄泉国に隠れた



【写真 1】黄泉比良坂

後をつけて通ったとされる伝承がある。こうした点から、「黄泉比良坂」は東出雲町の黄泉比良坂であると信じられている。(H30年度/H)

2) 金屋子神とたたら製鉄

そもそもイザナミの死の契機は、火の神を出産し火傷を負ったことによるものであった。

此の子を生みしに因りて、みほとを炙^やかえて病み^{こや}臥して在り。たぐりに成りし神の名は、金山毘古神。次に、金山毘売神。次に、尿に成りし神の名は、波邇夜須毘古神。次に、尿に成りし神の名は、弥都波能売神。…故、伊耶那美神は、火の神を生みしに因りて、遂に神避り坐しき。

(『古事記』上巻)

イザナミのたぐり(吐瀉物)からは、金山毘古神、金山毘売神が誕生する。この二神の名の「金山」は、鉾山を意味するとされる。天岩戸の話では、「天の金山の鉄を取りて」(『古事記』上巻)とあるように、「金山」から鉄が採取されていることがわかる。

この両神は、中近世において火の神・製鉄の神として信仰された金屋子神の親・金山彦命・金山姫命であるともされた。金屋子神はたたら製鉄がさかんであった中国山地一帯に信仰の広がりを持ち、安来市広瀬町西比田にある金屋子神社をその中心とする。

この神の神格については諸説あるが、基本的には女神とされており、血の穢れを忌み、死の穢れを好むという。たとえば、たたら吹き^{むらげ}の責任者である村下が死ぬと、それを高殿の元山柱に括り付けて鉄を吹くと良い鉄ができるとされた。

本授業では、神話に変容・展開した例としてこの金屋子神を取り上げた。また、古代における人々の暮らしと鉄のかかわり、中国山地で製鉄がさかんとなった理由、金屋子神の飛来ルートである播磨国千種や吉備国中山での製鉄について文献で確認を行った。

近代の製鉄法によってたたら製鉄が衰退し、現在日刀保たたらがその復元を行っていること、それが日本刀の材料となっていること、さらに日立金属の歴史と特殊鋼についても触れ、



【写真2】菅谷だたら山内

現在安来市が「安来節とハガネのまち」と謳う歴史を説明した。

フィールド学習では、年によって県内のたたら関係施設である和鋼博物館（安来市安来町）、金屋子神話民俗館（安来市広瀬町）、金屋子神社（同）、菅谷だたら山内（雲南市吉田町）、鉄の歴史博物館（同）を見学した。以下は学生のレポートである。

イザナミが生んだ神に金山毘古神、金山毘売神がいるが、一説にはこの二柱の子が金屋子神であり、また波邇夜須毘売神は粘土の神で、たたら製鉄に必要な粘土の元となる神とも言うことができる。つまり島根県のたたら製鉄は、イザナミが生んだ神やそれに関係する神によってもたらされたと考えられる。…金屋子神社には金屋子神が祀られており、境内にはたたら製鉄の際に発生した余分な鋸けらが飾られている。また金屋子神が降り立ったとされる桂の木は現在でも残されており、神社より奥の方にある。(H30年度/M)

4. スサノヲ神話と受容

亡き母であるイザナミを慕い、根の国に行きたいと告げ、暴虐をはたらいたために父イザナキから高天原を追放されたスサノヲは、出雲国の肥河（斐伊川）の上流、鳥髪（船通山）に降り立つ。

避り追はえて、出雲国の肥ひの河上、名は鳥髪とりかみといふ地に降りき。

（『古事記』上巻）

スサノヲは嘆き悲しむ老夫婦アシナヅチ・テナヅチと出会い、八岐大蛇が娘・クシナダヒメを喰いに來ることを聞く。スサノヲは計略をめぐらし、酒によって大蛇を酔わせて斬り散らす。その時、「肥河ひのかは、血に変わりて流れき」と斐伊川は血に染まった。殺された大蛇の尾には「つむ羽の大刀」があり、のちの「草那芸くさなぎのたち之大刀」とされた。スサノヲはクシナダヒメと結婚し、出雲国須賀に宮を作る。

講義では、スサノヲの神格と、八岐大蛇を殺すことの神話的意味を考察した。演習では大蛇神話の受容として『雲陽誌』を抜粋して読み、その特徴について考察をさせた。本文では上記のように、斐伊川の上流が舞台となるが、後世には斐伊川の上流・中流域及び島根半島においても大蛇退治の話が伝承されている。

フィールド学習では、年によって須佐神社（出雲市佐田町須



【写真3】天が淵

佐)、須我神社(雲南市大東町須我)、河邊神社(雲南市木次町熊谷)、八岐大蛇伝承地(雲南市各地)をめぐる。

スサノヲの神名には諸説あるが、「須佐の男」の意とも解され、須佐神社はスサノヲの本貫の地である。須我神社はスサノヲが宮を作った場所であることから、「日本初之宮」ともいわれる。八岐大蛇伝承地は『雲陽誌』に記載される大蛇が棲む場所とされる「天が淵」、アシナヅチ・テナヅチを祀る温泉神社、大蛇を倒した際の酒壺を祀る八口神社(「印瀬の壺神」、クシナダヒメが産湯を使ったという「熊谷さん」、大蛇の角が埋められているという「八本杉」を、雲南市観光ガイドの会のガイドの方の案内によりめぐった。以下はこの八岐大蛇伝承地を見学した際の学生のレポートである。

ヤマタノオロチ公園は、アシナヅチ・テナヅチが流した箸を拾った地を記念した公園であり、オロチのモニュメントは愛知万博から移設したものである。…オロチを退治したスサノヲは「ざざんまい」(座って舞う)を踊った。熊谷さんはクシナダヒメが使った産湯の井戸である。…八口神社にはオロチが飲んだ酒を入れた壺が埋めてあり、壺に触れると天災がある。温泉神社は四つの神社が合祀された神社で、アシナヅチ・テナヅチの神陵がある。オホナムチなど十三の神が祀ってある。温泉神社のある万歳山にはアシナヅチ・テナヅチが住んでいて、天が淵に住むオロチを見張っていた。養禅寺と天が淵はつながっている。養禅寺から溶けた鉄を流したが、オロチを退治できなかった。八本杉はスサノヲが斬ったオロチの首が埋められた地である。…神社に関する知識として、手水での清め方、鳥居・参道の歩き方、狛犬の由来、参拝の仕方などを教えていただいた。…高速道を通ると、雲南市木次まで大学から約30分で行けるので、近い場所にオロチ伝説があると感じた。(H28年度/N)

さて、八岐大蛇神話の受容のもうひとつの形として神楽がある。島根県の神楽には出雲神楽、石見神楽、隠岐神楽がある。現在もさかんに行われており、幼い頃より神楽を身近に見ていたという県内出身の学生は多い。平成29・30年度に解説を依頼したガイドの方は、神楽の面製作にも携わり、実際に使用するヤマタノオロチとスサノヲの面を学生に被らせてくださった。

多くの神楽演目がある中、本授業では八岐大蛇退治の演目に絞って映像を鑑賞した。神楽を知る学生も、自身の育った地域以外の神楽については



【写真4】神楽の面(ヤマタノオロチ公園)

殆ど知ることがない。大蛇の姿は地方や神楽団体によって異なり、出雲神楽では立ち大蛇や幕蛇などの単体、隠岐では単体の座り大蛇、石見神楽では提灯蛇胴による複数の大蛇となる。

神事的性格を色濃く残すものから興行的性格をもつものなど、様々な性格の神楽が行われている。たたら製鉄と併せて、神楽は中国山地地域に息づく歴史的文化といえるだろう。

5. オホクニヌシ神話と受容

オホクニヌシは、オホアナムチ、ヤチホコ、アシハラシコヲ、ウツシクニタマと、五つの名をもつ、全国の土着の神々の集合体ともされる神である。『古事記』ではスサノヲの子孫として誕生し、試練を乗り越え葦原中国の支配者として君臨する。しかし、アマテラスの意思により、アマテラスの子孫が治めるために国譲りが行われる。タケミカヅチに国譲りを迫られるオホクニヌシは、以下のように答える。

「僕は、^{まを}白すこと得ず。我が子^や八重言代^へ主神^{ことしろぬしの}、是白すべし。然れども、鳥の遊・^{すなどり}取魚^{みほのさき}の為に、御大^{みほのさき}之前^のに往きて、未だ還り来ず」とまをしき。故爾^{かれしか}くして、天鳥船神を遣して、八重事代主神^めを徴し来て、問ひ賜ひし時に、其の父の大神に語りて言はく、「恐^{かしこ}し。此の国は、天つ神の御子に立て奉らむ」といひて、即ち其の船^ふを踏み傾けて、天の逆手を青柴垣に打ち成して隠りき。 (『古事記』上巻)

オホクニヌシは、自身は国譲りの是非を答えることができないため、自身の子であるコトシロヌシが答えるだろうと言う。コトシロヌシは託宣の神とされ⁽⁵⁾、「御大之前」、即ち美保の岬（松江市美保関町）におり、鳥の狩猟と魚の漁をしていた。使者アメノトリフネに呼ばせてタケミカヅチが尋ねると、「畏れ多い、この国はアマテラスの子孫に奉ろう」と言い、船を傾け「天の逆手」を「青柴垣」に打ち成して隠れたという。この時のコトシロヌシの行為の意味については未だ明らかでない。

この『日本書紀』⁽⁶⁾の対応箇所は次のようにある。

其の子事代主神^{いでま}遊行し、出雲国の三穂【三穂、此には美保と云ふ。】の碕に在り、釣魚するを以ちて^{たのしび}楽とす。或に曰く、遊^{とりのあそび}鳥を楽とすといふ。故、熊野の諸手船を以ちて、【亦是^{あまのはとふね}天^い鳩船と名ふ。】使者^{いな}稻背脛^せを載せ遣して、高皇産霊^{たかみむすひ}の勅^{みことり}を事代主神に致し、且^{かへり}報^{ことまを}さむ辞を問はしむ。 (『日本書紀』神代下第九段 正文)

ここでの使者は「熊野の諸手船」或いは「天鳩船」に乗ったイナセハギであった。また、同段の異伝では、タカミムスヒがオホモノヌシ（オホクニヌ

シに対応)に、ミホツヒメを妻として与えようと告げる。

高皇産靈尊^{たかみむすひのみこと}、大物主神に勅したまはく、「汝^も、若し国神を以ちて妻とせば、吾猶し汝を疏^{うときこころ}心有り^{ひき}と謂はむ。故、今し三穗津姫^{とこしへ}を以ちて、汝に配^{あは}せ妻とせむ。八百万神を領^{ひき}みて、永^{とこしへ}に皇孫の為に護り奉るべし」とのりたまひ、乃ち還り降らしめたまふ。(神代下第九段一書第二)

美保の岬付近の美保神社の祭神に、事代主神と三穗津姫命がある。後者はこの一書第二の「三穗津姫」に対応すると考えられる。ここでは司令神タカミムスヒの娘として国神の妻と対比的な存在であり、ミホツヒメは天つ神として認識されていたことがわかる。それは「ミホ」という音が喚起する「御穂^{ミホ}」の意によるものだろう。「天穂日命^{アメノホヒノミコト}」や「天忍穂耳命^{アメノオシホミミノミコト}」などは、稲穂の神格を有する神はいずれも天つ神であった。岬という場所の神話的意味として、聖なる場所、神々の出会いの場であるように、美保の岬もまた、島根半島の先端部として聖なる場であることを確認した。

本授業でのフィールド学習ではこの美保関町を訪れ、美保関灯台、美保神社、客人社^{まろうとしや}を見学した。美保神社は『出雲国風土記』(嶋根郡)に「美保社」と記される古い由緒をもつ社である。出雲独特の神社様式である大社造が二殿並ぶ特殊な本殿をもち、港に面している。

美保神社横山宮司から解説を賜り、学術的にも注目される青柴垣神事と諸手船神事の意義についても詳しく学んだ。両神事は前掲の国譲りの場面に因むもので、前者は毎年4月7日、後者は12月3日に行われる。春の神事は豊穰の祈願を、冬の神事は収穫祭としての意味をもち、両者がひとつのサイクルをなしている。

美保神社付近に位置する末社客人社はオホクニヌシを祀り、諸手船神事の前には客人社祭が行われる。また美保関灯台(地蔵碕)では、海に向かって鳥居が建ち、「地之御前」さらに沖合には「沖之御前」が海に浮かぶ。五月には毎年神迎神事が行われ、深夜に船が「沖之御前」まで神霊を迎えに行く。このように、コトシロヌシの釣り^{つり}と鳥の狩猟を行ったとされる場所は、漁業や狩猟を中心とする人々に古くから信仰された地であった。以下は学生のコメントである。



美保神社は大社造の二殿の間をつ

ないだ特殊な形式で作られており、【写真5】美保神社

美保造或いは比翼大社造と呼ばれる。このことから、祭神の二神も同格に扱われていることがわかる。出土した勾玉から推測すると千五百年前頃からこの場が信仰されていたことがわかる。拝殿には壁がなく、一説には船倉を模して作られたのではないかとと言われる。古来より海上交通の要として栄えたこと、祭神の事代主神が海上安全・大漁の神だったことも理由の一つである。祭神二神とも音楽が好きな神であり、日本各地からの楽器が奉納される。(H28年度/K)

6. おわりに

文学、特に古典文学におけるフィールド学習とは、歴史の中で受容され、形成された場所の中に、描かれた風景の痕跡を探す作業である。その風景とはいうまでもなく人々の暮らしの営みと一体となったものである。

「出雲神話」の講義・演習とフィールド学習を終え、最後に「神話」とは何かを考える時間を持った。

神話とは虚構であり、また真実でもあるという二つの相反する意味を有している。『日本国語大辞典 第二版』においても、「神話」とは、古代より伝えられた神聖さと起源性をもつ物語という意味と、絶対的と考えられているが実は根拠のない考えという意味の二つが記される。これらの二つの意味はどこから来るのか。

宗教学者・エリアーデは、神話の最も重要な要素を、「起源」にあるとする⁽⁷⁾。神話とは、森羅万象や制度の「起源」を語るテキストである。しかし、その「起源」を知る者は誰も存在しない。つまり、所与のものとしてある自然のあらゆる「起源」を記そうとするとき、それは虚構でしかないことになる。

新聞やテレビのニュースにおいて「神話」という表現が使われるとき、それはよく阪神・淡路大震災や東日本大震災に関して、「安全神話」「原発神話」の崩壊という文脈で用いられる。「神話」とは絶対的と信じられながらも、いつか崩壊するものでもあった。

「神話」には実は根拠がない、という考えに対し、学生からは「神話は、実際に起きた出来事だと思って信じていたので、驚きと同時に残念でもあります」、「何だか夢を壊された気分になる」という純粋な反応があった。しかしそれでも今なお神話が読まれ続けているのはなぜなのか、ということ問いかけると、学生は再びその価値に気づいたようだった。「ハッとしました。

100%正しいことは誰にもわからない。だが、当時の人々が神話を残そうとする様子が脳裏に一瞬だけはっきりと浮かんだ」というコメントもあった。神話の価値は失われることはないのである。フィールド学習でみてきたよう

に、人々の暮らしの営みと信仰はそこに変わらず存在する。その中で生み出された、ひとつの特殊な思考様式によって表現されたものが神話であった。以下は学生が最後のまとめに書いたエッセイの一部分である。

神話が二次創作的に、様々な方向から沢山の人々が考察しているというのは、とても面白いと思いました。恐らく、その仮説には正解などないかもしれませんが、正解がないからこそ、想像力を膨らませることができ、後の時代にも語り継がれてきたのではないかと思います。…何年もかけて、沢山の人々が一つの物語について深く考えて来たことは、素晴らしいと思えました。それが地元のことであれば、その土地への愛情に繋がっているのではないかと、地元のガイドさんの話を聞きながら感じました。(H30年度/H)

神話は土地への愛着に繋がっている。我々がそこで生きていくための前提となる〈揺るがぬ歴史〉が神話であった。学習の過程において、学生がそれを肌で感じ取ることができたという事実は大きい。神話とは何かといったことを考える学びは、神話のテキストの解釈や、古典文学の学びにとどまらない。地域の人がいかにそこで生きるのかという問いに繋がる学びといえるだろう。

(1) 『出雲国風土記』を教材とした授業については、拙稿「『出雲国風土記』を用いた地域の神話・歴史教育」(『しまね地域共生センター紀要』第2号 2015年9月)を参照。

(2) 本文の引用は山口佳紀・神野志隆光校注・訳『新編日本古典文学全集 古事記』(小学館1997年)に拠った。

(3) 比婆山の諸説の検討については、安本美典氏『邪馬台国と出雲神話』(勉誠出版 2004年)に詳しい。

(4) これらのイザナミの陵墓としての「比婆山」については別稿にて論じる予定である。

(5) 西宮一民校注『新潮日本古典集成 古事記』新潮社 1979年

(6) 本文の引用は小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守校注・訳『新編日本古典文学全集 日本書紀』(小学館 1994年)に拠った。

(7) ミルチャ・エリアーデ『神話と夢想と秘儀』(国文社 1972年)など

【謝辞】本授業を行うにあたり、和鋼博物館、金屋子神話民俗館、須我神社、須佐神社、雲南市観光協会、美保神社、スサノオ観光の皆様にご協力を賜りました。この場をお借りして心より御礼を申し上げます。

【附記】本文における学生によるコメント・レポート・写真は許可を得て掲載しています。